

《論文》

「ほっくり信仰」に潜む介護問題

— 文学作品を通して考える —

佐々木 陽子

「ぼっくり信仰」に潜む介護問題

— 文学作品を通して考える —

佐々木 陽子

和文抄録:「ぼっくり信仰」とは、祈祷を施された下着などを身に着けることで、長思いすることなく往生できるとされる俗信である。本稿のねらいは、「ぼっくり信仰」が忌避する介護のあり様を、介護小説の力を借り、ジェンダーの視点から考察することにある。在宅介護では、嫁や妻などの女性が舅や夫などの男性を介護する比率が高いことが指摘されているが、介護小説では、逆に夫の妻介護が崇高な美しさをもって描き出される傾向がみられる。有吉佐和子の『恍惚の人』は、認知症を扱ったエポックメイキングな作品だが、「ああはなりたくない」との思いから「ぼっくり信仰」ブームを生み出した、と小説との連結が指摘されている。本稿では、主に有吉の作品以降出版された15の文学作品を、介護者と被介護者の軸を使って類型化を試みる。

Key Words : 介護小説、介護者と被介護者、ぼっくり信仰、ジェンダー 文学作品

I 本稿の問題意識

「ぼっくり信仰」⁽¹⁾とは、長思いして寝たきりになり、下の世話までされることなく安らかな死を祈願する土俗⁽²⁾的な俗信⁽³⁾を意味する。「ぼっくり信仰」の信仰対象は観音や地蔵が多いものの、阿弥陀、不動、薬師、明王、閻魔、天狗、那須与一、弘法大師など多岐にわたり⁽⁴⁾、これらを信仰対象とする寺社等から祈祷を受けた下着を身につけたり枕の下に置いて寝たりすれば、下の世話にならずに長思いして介護されることなくぼっくり往生ができるとの現世利益⁽⁵⁾に依拠した俗信である。祈祷を願う者にとって、これが俗信にすぎないことはわかっていながら、それでも祈祷を受けた下着を身に着けることで安堵する人間の姿がそこにある。大祭など年何回か祈祷日が決められていて、その日に下着持参で祈祷を受けることもできるし、売られている祈祷済みの下着を購入する方法もある。また、今日では、郵送で下着を送り祈祷料を払って祈祷を受け、送り返してもらうといったサービスまで提供されている。

近代は合理性を思考や生活において前提視する時代であり、労働力・経済人としての人間の局面が突出するゆえに、成年、壮年が人生の中心に位置づけられる。「老いを生きることは、どのように死ぬかという問いと不可分」、近代は一言で言えば「生を謳歌してきた時代」であり生産性中心の経済生活からなる近代において、労働力足りない老人の価値は貶められる(今村1992: 44-45)。こうした近代が産みだした人間類型は、1つには資本主義を支える労働力の提供者として生産活動に携わり、富の蓄積に貢献する生産者たる成年・壮年の人間類型、いま1つには、自立した孤独なる自我を有し、理性的存在として知性をそなえた人間類型が想定されよう。前者に対峙するのが、生産労働からリタイアし、もはや生産活動に携わることなく消費の側にのみ

位置づけられる老人であり、後者に対峙するのが、非科学的・非合理的なものに接近する土俗的習俗行為者や、認知症などの障がいと共にある老人など自立できずに他者に依存して生きざるをえない人々といえよう。本稿は「老いと死をめぐる想像力」という上位のテーマを構成する3つの下位テーマ（蔭膳とお供え・ぼっくり信仰・棄老物語）のうちの「ぼっくり信仰」を通じて、老いとその先の死を考えようとするものである。本稿が扱う「ぼっくり信仰」の祈願者の多くは高齢者だが、祈願したからと言って安楽な死が保障されるとは思わないであろうが、理性ではいかんともしがたい死の恐怖や死に対する忌避感情を前に、「すぎる心性」を手放せない人間のあり様が、この俗信から見えてくる。かつてほど盛んではないにしても、時代を超えて「ぼっくり信仰」が生き続けていることが現地調査から見えてきた。死は誰もが避けて通れないものでありながら、自らの死を経験として語れないという意味での死の「絶対的不可知性」を前に、死の余剰に思いが馳せよう。自らの老いを実感し始める頃になると、身近な情愛の対象の死すなわち「2人称の死」が次々に訪れ、やがて我が身に訪れる「1人称の死」⁶⁾から逃れられないことを自覚せざるをえなくなろう。「死は、生の最期とばかり考えていて、誰にとってもはじめてだということに、なかなかきづきませんでした。良い死に方を経験した人は誰も生きておりません」（伊藤2011：289）との言明は、当たり前的事でありながら我々は忘れて生きていると言えよう。

本稿は、長患いすることなくあるいは苦しむことなく逝きたいとの利己的感情と、寝込んで下の世話で家族に迷惑かけることなく逝きたいとの利他的感情の接結点到に位置づけられる「ぼっくり信仰」という俗信を通じて見えてくる老いと死の問題を、文学作品とりわけ介護小説⁷⁾に着目して考えたい。というのは、「ぼっくり信仰」には介護を忌避したいとの願望が潜在化しているからである。文学的想像力が生み出す介護小説を借りて、介護者と被介護者のジェンダー非対称の問題などを照射したい。

なお、先行研究については、拙稿（佐々木2011、2015）ですでに触れているため、本稿では扱わないこととする。

II 文学作品の力を借りることの意義

本稿が文学作品の助けを借りるのは、文学的想像力が、論理だけでは説明しつくせない「老いや死」の混沌としたわからなさを考えるに際し、視界を切り拓く力を発揮すると期待するからである。「イメージを生み出す力」「不可視なものを現前化する力」として想像力⁸⁾を捉え、文学的想像力が本稿のテーマである「ぼっくり信仰」に潜在化した介護問題の考察に力を付与してくれよう。通常、科学では目の前で起きていることを詳細に観察するために目を見開いて見ることが前提とされるが、想像力を働かせるには特段目を見開く必要はない。たとえば情愛の対象の死者を想像する時、我々はむしろ眼をつぶってそのイメージを追いかけるだろう。なぜ祈るとき、人は往々にして目をつぶるのであろうか。我々は聞こえないもの、見えないもの、といった不確かなものにも囲まれて生きており、そうしたものへの接近のルートを切り拓く力を発揮してくれるのが想像力であろう。

Nisbet（ニスベット）は、自然科学でも社会科学でも創造的行為には「強烈な想像力」が不可欠と捉え、「芸術家と科学者が共通して持っているものは外的な世界を理解したいという欲求、すなわちその一見したところの複雑さを、混沌としてさえ見えるものを、ある種の秩序立った表象に移し入れたいという欲求である」（Nisbet 1976=1980：11、22）と記す。文学的想像力は虚構世界をもその対象とし、論理で対象を弁別し鮮明化しようとするほど、分析から漏れてしまう混沌や余剰に気づかせる力を有すると言えよう。「ぼっくり信仰」の祈願は、「苦しむことなく、長患いすることなく逝けますように」というものであるが、優れた文学者の想像力は、介護する側の心の揺らぎのみならず、介護される側の言葉に還元されない思いまでも表出させることで、死の有する重い意味を投げかける。

Ⅲ 介護小説の分類

Ⅲ. 1 介護とジェンダーの実態

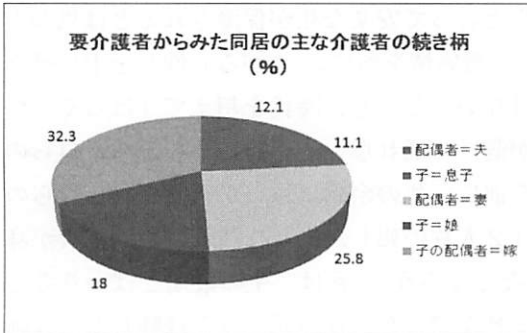


図1 在宅介護において誰が介護にあっているか

図1のデータ⁹⁾は2001(平成13)年度のもので、同居して介護している者の性別は女性対男性が77%対23%で、2015(平成25)年度では、介護者の性別は女性対男性が69%対31%となり、10数年で男性がわずかながら増えているが、圧倒的に女性が在宅介護を担っている。最新のデータでは子とか配偶者とのみ記され、性別が明示されていないため、図1のデータとの比較に使用できない。

米村・佐々木編(2008)の「はじめに」で指摘されているように、女性を介護の担い手として自明視し、実子の息子ではなく、その配偶者の嫁に介護が割り振られることを当然と

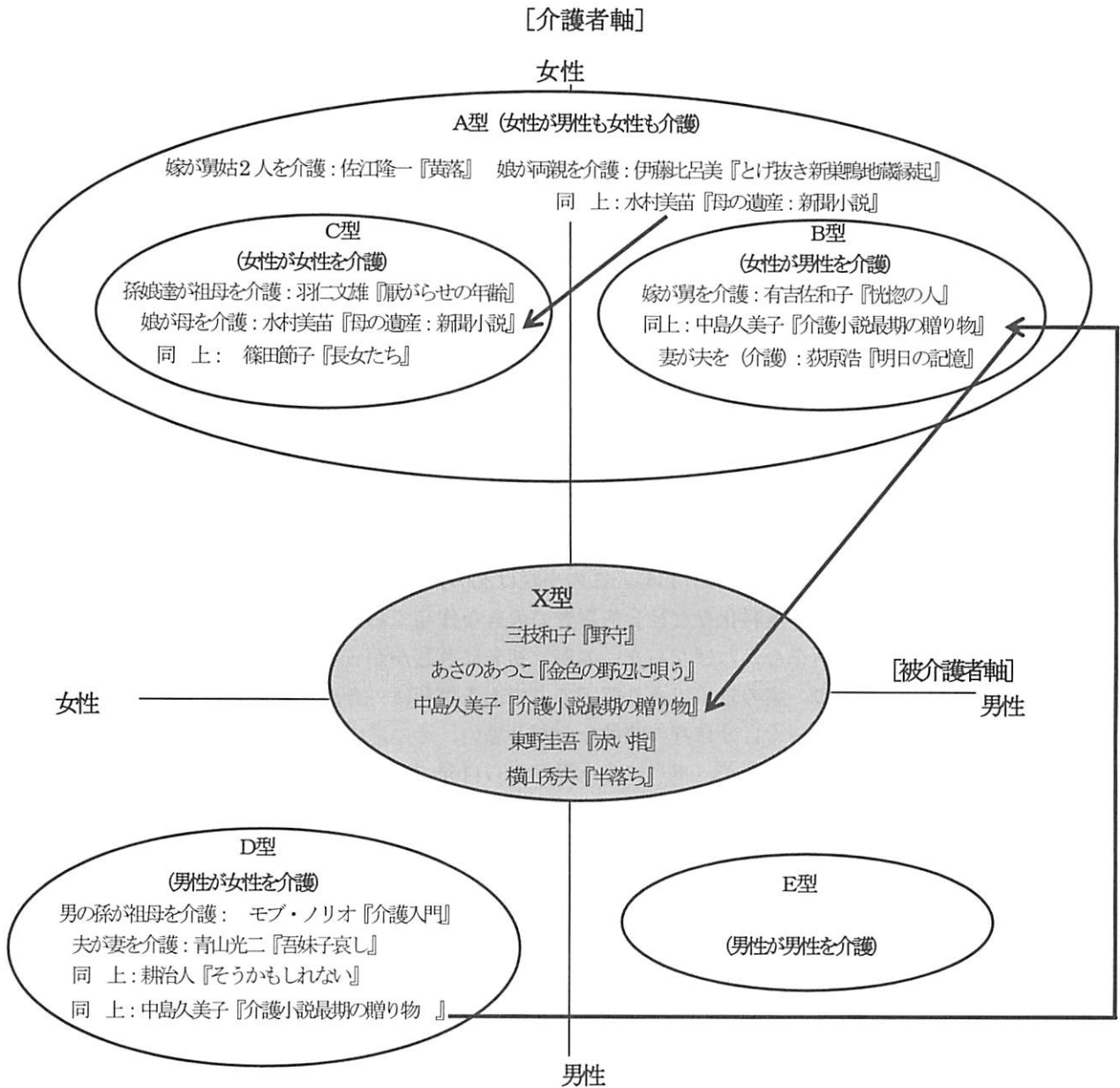
みなしてストーリーが展開されるのが、多くの介護小説の構造となっている。以下では次頁の図2に示した分類に沿って、類型化を試みる。

Ⅲ. 2 介護小説の類型

A型(女性が男女ともに介護)

佐江衆一の『黄落』では、嫁が舅と姑の両方の介護者である。還暦近い妻が夫の高齢である両親を介護する設定である。口では「苦勞かけるな」といいながら妻頼りで介護が進む中、夫は離婚を申し出ることによって妻を介護から解放してあげられると考える。だが、妻は夫に向かって「その前に、おばあちゃまのオムツを、あなたが取り替えなさいよ」とストレートな言葉をぶつける。夫の母親は認知症を発症し、浮気性の老爺である92歳の夫が接近してくると、認知症でありながら老婆の妻は「シッシ」¹⁰⁾と払いのけ、夫の首を絞めたこともある。絶食状態を選び、88歳で夫の母親が亡くなった時、夫は「終わった」と思ったものの、妻への感謝は浮かんでさえない。妻は夫に心を閉ざしながらも、のこされた義父の介護をまだ続ける。この作品も介護を女に丸投げするジェンダー構造の上に物語が展開する。

伊藤比呂美の『とげ抜き 新巢鴨地蔵縁起』は、母親の介護の場面が多く登場するものの、娘は両親を介護する。伊藤比呂美といえば詩人として知られているが、独特の詩情あふれる言葉で、おまじないのような私小説のようなエッセーのような詩のようなジャンルの区分けを錯乱させるものに、この作品は仕上げられている。アメリカのカリフォルニアに移住し離婚再婚子育てと忙しい日々を送るなか、両親の住む熊本を年に何度も太平洋を渡って訪ずれ介護にあたる。母は歩くのも困難なほどになりトイレに行くのもままならず、脳梗塞を何度か起こし入退院を繰り返しながら、やがて病院で寝たままの状態となり、20分おきに看護師さんが来て、母の向きを変えてくれる。父は胃がんの手術を受け、やがて歩行も徐々に困難になり、鬱気味で意欲を失いながらも、ヘルパーさんの援助によって在宅介護を続けている。父は転んでも自力で起き上がるのに2時間かかる、と私に訴えてくる。「つらい。さびしい。くるしい。くらい。何ができるか。わたしに何が」と逡巡する(伊藤2011:202)。呂律がまわらず動悸が激しく、父も入院となったとの連絡を受ける。その時は、退院ができたものの認知症が出はじめる父。アメリカには狭心症の高齢の夫、精神を病んでいるとしか言いようのない極度に痩せた娘、そして初期の子宮がんを抱えた私、その実態は、通常であれば壮絶としか表現のしようがないが、「この苦が。あの苦が。すべて抜けていきますように」(伊藤2011:39)と、「とげ抜き地蔵」「みがわり地蔵」への呪文のような言葉が続く。リズム感あふれ飛翔する言葉たち、深い悩みを抱えながらもすっ飛んだような私、不思議な魅力を醸し出す作品である。



X型

- ① 象限に関わりのないもの。介護者・被介護者の性別を超越して、固定した介護者が誰かを想定しえないほど、介護期間が短くあっけなく逝ってしまう。三枝和子『野守』。
- ② 介護小説というジャンルからはみ出す要素をもつもの。老いそして死ぬことを文学的想像力で表現している。介護者が語るのではなく、この作品は、死にゆく人あるいは死者に語らせている。あさのあつこの『金色の野辺に唄う』。
- ③ 舅による姑の夫婦間介護、嫁による舅介護、そして最終的には、グループホームに入居し看取られるなど多様な介護の類型が登場する。中島久美子『介護小説最期の贈り物』。
- ④ 介護をめぐる推理小説の展開で、介護小説とはジャンルを異にする。東野圭吾『赤い指』、横山秀夫『半落ち』。

図2 介護者と被介護者の軸からみる類型

水村美苗『母の遺産 新聞小説』では、糖尿病の父は老人病院に入り、しかも8人部屋の外も見えないカーテンで仕切られた空間にいる。父を看取ったのは、次女の美津紀一人である。母はしぶしぶ顔を見せたものの、別の男にうつつを抜かしていた。父が亡くなる最後の1年は、母は開き直って一度も父の見舞いに来なかった。娘二人は交互に見舞い、寝たきりになってからは2週間に1度のペースとなる。この物語は、タイトルにあるように母との関係に力点が置かれ、父親の介護は比重が軽いながら、両親を娘たち特に次女がみたためA型にも入れている。

B型（女性が男性を介護）

1972（昭和47）年に刊行された有吉佐和子の『恍惚の人』は、「ぼっくり信仰」を考察するのに避けて通れない作品である。痴呆症（原作の表記）にかかった舅の介護を働きながら行う嫁の話である。1970年代の「ぼっくり信仰」ブームの火付け役になったとされ、1972年に発行されたこの小説は、戦後の水子ブームと同様に、「ぼっくり信仰」を「現代の民俗」いわゆる「流行習俗」にしたとされ、この小説の影響力の大きさについては、多様に言及されている。例えば、大谷は、この小説が「ベストセラーになって老人問題がクローズアップされ、同時期に『植物人間』が話題になりはじめた」（大谷2005：102-103）として、安楽死立法化提案の再開との重なりを指摘する。また、文庫本の解説で社会福祉学者森幹郎は、この小説が老人福祉史の記録されるべき位置にあると記している（森1982=2003:434）。この小説は200万部を超えた空前のベストセラーとなり、シルバークロケットの設置、都営バスの無料化など社会的影響の大きな作品であった。

姑の急死後、84歳の舅の世話をやかねばならないのが、初老にさしかかった嫁の昭子である。弁護士事務所に勤務しながら介護するものの、実の息子であり昭子の夫である信利は、介護を妻任せにする。夫はすっかり^{もろく}老衰してしまった父親を老いていく自分自身の映像なのだと思います、その思いがこびりついてはなれない。夫は口先では「すまん、いつも」と言うが、本当にそう思うなら自分でやればいいと昭子は腹が立つ。昭子は罪悪感もなく「茂造が死んで呉れたらどんなに楽だろう」とさえ考えるようになっていく。舅は「とろーっとした目を半ば閉じ、半ば開け、夢と現実の境界にある恍惚の世界に魂を浮かばせているようだった」（有吉1982=2003：286）、とその様子が描写され、この老爺は徘徊し警察の世話になったり、自分の排泄物をべつとりと畳になすりつけたりもするほど病状は悪化していく。それでいて、子どもにもどっている舅は、何もないかのような笑顔を浮かべている。「人間の最期とはどういうものだろうか」とふと昭子は考える。「今までは茂造の存在が迷惑で迷惑でたまらなかったけれど、よし今日からは茂造を生かせるだけ生かしてやろう。誰でもない、それは私がやることだ」（有吉1982=2003：368）との思いに移行する。舅の死後、葬式で涙を見せた者が1人もいなかったことにふと昭子は気づく。だが、思いもよらないとき、昭子の眼から涙が噴きこぼれ、自分が泣いていることに気づく場面で小説は幕を閉じる。

『恍惚の人』は、日本の福祉行政の貧困を摘発し福祉の推進役となったと言われ、他方では「あはなりたくない」との祈願をこめた「ぼっくり信仰」の推進役にもなったとも言われる。新聞記事でも「ぼっくり寺」への参拝急増の報道がなされたほか（朝日新聞2008年6月2日、朝刊、地方紙奈良版）、民俗学者の松崎も「一九七二（昭和四七）年に有吉佐和子が『恍惚の人』なる小説を世に問い、そのなかでボックリ信仰に触れたところ、にわかに注目され、一種の社会現象として爆発的に流行した」（松崎1991：189-190）と記している。

萩原浩の『明日の記憶』は、若年性アルツハイマーの問題を扱っている。50歳で広告会社のやり手営業マンの雅行は、めまいなど体調不良がでてくる。妻の枝実子につつかれしぶしぶ病院で検査を受けるが若年性アルツハイマーであることを告げられる。良き家庭人であったとは言えない仕事人間で仕事に没頭してきた雅行にとって、受け入れがたい病状である。一時は絶望のあまり自殺を考えた事もある。だが、枝実子は寄り添い、2人でこの難病を受け入れていく覚悟をする。記憶が音もなく崩れていく現実の中で、妻さえ誰だかわからなくなっている。2人が最後に言葉を交わし、小説は幕を閉じるが、妻は「枝実子っていいです。枝に実る子と書いて、枝実子」素敵な名前だ、と夫はいい、「いい名前ですね」と誉める。妻は夫に寄り添い生きていく。介護の始まりであり、介護がこうした病状では必ずしもベッドの上とは限らないことを教えている。

C型（女性が女性を介護）

丹羽文雄の『厭がらせの年齢』は、介護者と被介護者関係が固定されストーリーが展開される中で、両親がすでにいない成人した中年の孫娘らに、たらいまわしにされ毛嫌いされる祖母の話である。うめ女と呼ばれる86歳の祖母は、娘を一人生み、32歳の時に夫と死に別れ53年間未亡人であった。娘も若死にし頼るは孫娘しかない。「可愛げのある年寄りらしく振る舞え」「盗癖があって人のものをすぐとる」「働かざるもの食うべからず」「お婆さんひとりのために、私達姉妹は仲良くやっていけない」「人一倍よく食べる」とさんざん言いたい放題言われ、亡き娘の次女の疎開先まで送り込まれるが、電気もなく、夜な夜なうめ女がお手洗いに行くのに大騒ぎとなる。孫娘一家は友人の東京の空き家を借りられることになり、便所のそばの三畳の部屋がうめ女にあてがわれるが、なんでもかまわず布という布は、無邪気にはさみで切り裂いてしまう。さらには、下の締りが悪く汚物をそこらに落とすようになる。「腹たてて厭がらせをする気力だけは残っている」と周囲は考える。しかし、わざと厭がらせをしていると思える節もある。そうした向きの行動を見せるこの老婆に、なおさら周囲は憎悪をいだく。その拳句、「痛」「化け物」「厄介な荷物」「廃人」などと老婆を形容する。

水村美苗の『母の遺産 新聞小説』は、父を次女の美津紀が一人で看取った後、母を介護することになる。80歳を過ぎた母は、贅沢でおしゃれで我儘であったが、大腿骨骨折で病院に運び込まれ、手術後リハビリをし、姉の奈津紀と相談し世田谷の家を売って民間老人施設入居のための資金作りを進めていく。「母が死ぬまでは、文字通り悪夢のような日が続いた」「母に早く死んでほしかった」「母の死をはっきりと願うようになった」「ママ、いったいいつになったら死んでくれるの」こうした言葉が反芻される。肺炎で危ないとみられた時期さえも母は無事通り越す。姉との交代の見舞いが続き疲労が抜けない。母と娘の屈折した関係は、憎悪のむき出しの心情がありながら、まるで糸がもつれ絡まるように引き合ってもいる。母の死によって母の呪縛から解放された美津紀は、過去に浮気をし、現在も進行中の別の恋人がいる大学教員の夫との離婚を決断する。その夫とはパリ留学時代に知り合い、結婚への道を進んだが、50代に入り自分は夫から愛されてはいなかったという認めたくない事実に向き合うことになる。自分のこれからの道を探り出し、自分だけの空間を手に入れる。

篠田節子の『長女たち』は「家守娘」「ミッション」「ファーストレディ」の3部作から成り、「家守娘」が最も介護にストレートに結びつくため、本稿では「家守娘」に絞る。父亡きあと、この大きな屋敷を守ってきたのが、離婚して実家に戻っている長女の直美である。骨粗鬆症で痛みを訴える72歳の母をトイレに行くにも支えねばならない。キャリアウーマンとして働きながらの介護である。長女だからとあたり前のように期待をかけられ当てにされるものの、政治家の家に嫁いだ妹は、可愛がられ慈しまれる娘のままである。母に認知症が始まり幻視や妄想にとらわれだす。直美が離婚した時、婚家に置いてきた娘（母にとっての孫）の優紀は当時2歳半であった。その名を認知症の母は呼び、会話を一人でしている。「受け入れてあげてください」という医者言葉は、説教にしか聞こえない。外部のヘルパーの受け入れを極度に嫌い、家に入れない母の介護は、結局は長女の自分にかかってくる。介護とフルタイムの仕事の両立は困難となり退職を余儀なくされる。母の妄想に付き合わされて、こちらも気が狂いそうだと直美は思う。ある男とのあいびきに出たすきに、母は持ち出したマッチで近所の家に火をつけ放火で警察の取り調べを受ける羽目になり、すべて投げ出したくなる直美であった。母は簡易鑑定の結果、一時的な収監の形での入院はあったものの、最終的には家に帰ることができた。ある時直美は昔の写真を見ながら、妄想の中で母が話し込んでいた「ユキちゃん」の正体を知る。それは母の孫、つまり私の娘の「ユキちゃん」（優紀）ではなく、栄養状態も悪い時代に妹である母に雨具を貸し自分はびしょ濡れになって帰って肺炎を起こして亡くなった姉の「ユキちゃん」（雪子）だったことに気づいたのである。

D型（男性が女性を介護）

2004年度の芥川賞受賞作品であるモブ・ノリオの『介護入門』は、男の孫が祖母を介護するという特異な設定である。この『介護入門』では、祖母をみている孫が、大麻を燃らせながら介護にあたる。青年はこう告白する。「この家において祖母と向き合う時にだけ、辛うじてこの世に存在しているみたいだ。知らず知らずのうち

に、ばあちゃんの世話だけを己の杖にして、そこにしがみつ়くことで生きてきていた」と(モブ2003:104)。2003年度の川端康成賞受賞作品である青山光二の『^{わがも}妹^{みか}子哀し』は、妻による夫や義父母介護とは異なるパターン、すなわち夫の妻介護の分類に入る。『吾妹子哀し』では、すでに老爺と化した主人公が、認知症で徘徊や記憶をなくしていく老婆の妻を親身に介護し、若かりし頃の妻をいとおしく回想しながらも、妻へ愛情を注ぐ。しかし、認知症の妻が便器の外に漏らした大便を黙って夫が片づける場面が描写されているが、この類の行為は、介護する者であれば誰でもやっている日常的行為でありながら、男性である夫が妻のためにするとスポットが当てられていると思われなくもない。耕治人の『そうかもしれない』も、この分類に含まれよう。『そうかもしれない』では、病状が進みわからなくなってきた妻の三度の食事の世話を夫がし続けてきたが、夫婦ともに病を背負い込むことになり、夫も入院することになってしまう。夫さえ見分けられなくなっている妻は、老人ホームから車椅子に乗って夫が入院している病室を訪れる。妻の手を握ると夫は涙が止まらない。付添い人が、「奥さん、ご主人ですよ」と声をかけると、「そうかもしれない」とはっきりした声で言う。「そうかもしれない」50年にもわたる夫婦の生活で、夫らしいことはしてきていない自分、いつも困難に出会うと逃げ腰だった自分に妻は非難を浴びせたことがなかったことが思い出される。「そうかもしれない」という妻の吐き出した言葉の含蓄に思いが向かう。

E型 (男性が男性を介護)

この類型にあてはまるものは管見の限り見いだせない。

X型 (4つの象限に関わらない。あるいは象限からはみ出るもの)

いわゆる介護らしい介護も受けず、周囲も覚悟のないまま短期間で逝かれるという展開として三枝和子の『野^の守』があげられよう。老妻は昔の女で何事も辛抱強く、夫に仕える女であった。妻は夫より3際年上で、72歳で亡くなる。妻の死亡診断書には「老衰」と書かれたが妻の姉や娘たちは、3人の息子の嫁たちが心を込めて世話しなかったとなじった。「七十二歳になっても、妻は、まめまめしくよく働いた。息子たちとの同居を拒んだ。(略)まさか自分が先に寝込むなどとは思ってもみなかったのだろう」(三枝1999:43)、と夫は思う。寝込むことを知らない妻であったが、1週間ほど家中をはいずり布団の中で唸っているのを見ても、夫の私は妻を疎ましくさえ思え、「医者に見せろ」と怒鳴りつける。椎間板ヘルニアとかで2週間入院となり、下手すると寝たきりになるのではと娘たちは心配する。私の不機嫌は増していった。「退院してからの妻は日増しに食欲が失くなり、遂に一週間後には水しか飲まなくなった。(略)水しか飲まなくなって更に一週間後。痩せに痩せて、まるで線香のように細くなって、妻は死んだ」。娘は「お母さんは自殺よ」といって泣き伏せた。「皆に迷惑を掛けたくなくて、自分で断食して死んだのよ」と娘は言う(三枝1999:44)。妻を「意気地のない性格」で腰痛に負けて身体を衰弱させたと勝手に解釈する夫の自分がある。だが、死ぬ十日ほど前に「長いことありがとうございました」とあらたまって礼を言った妻のことが思い出された。妻のちょっとしたミスに怒鳴りつけたり思いやりある態度など見せたことのない夫であった。娘はすかさず自分達夫婦のことを、「他人みたいな淋しい夫婦」だったと言う。妻は退院後、少し寝込んだだけで逝ってしまった。娘や嫁が退院後極めて短い期間世話したであろうことは想像できるが、この夫である男性が、介護したとは到底想像できない。介護期間は極めてわずかで特定の人がつきっきりで介護体制をとることなくあっけなくこの世を去ってしまった事例である。

次に扱うのがあさのあつこの『金色の野辺に唄う』である。『金色の野辺に唄う』は、死者の語りを取り入れている点が特筆すべきであろう。介護小説は介護する側の語りから構成されることが多い中で、死者に語らせる手法を採用し、まさしく文学的想像力の生み出したものであると言えよう。こうした想像力によって、死というものが残された生者の独占物ではないという視点が切り拓かれていくように思える。介護小説の常道は、介護する側が介護される者を観察し記述することで、小説が構成され、介護される側が病気であったり認知症だったりという設定のため、介護される側は語る言葉を持たないことが多いといえよう。いま一つの特異性は、壮絶な介護風景の描写はなく、いわゆる天寿を全うするともいえる死に方が設定されている点である。介護を

テーマとした小説では、壮絶な介護の情景が描写されることが往々にしてあるが、本書では、柔らかな光を、うろこ雲の浮かぶ美しい空を見たいと、死にゆく老婆の松恵は願う。しかし「もはや叶わぬことのようにです。わたしには、^{まがた}臉を持ち上げる力さえ残っていないのですから。ええ、わたしは死に掛けております。あと数日、いえ、一、二日の命でしょうか」(あさの2008:7)、と死にゆく老婆は語る。家族に囲まれて、92歳まで生きることができ、さしたる苦痛もなく逝ける自分は「果報者」だと松恵は思う。「ああいうの、大往生って言うんかね」「眠るみたいにすーっと逝ったわ」(あさの2008:49)、と娘とはいうものの初老にさしかかりながらも美貌を誇る奈緒子は、90過ぎの実母の死を実に静かな死だと思ふ。死者の松恵とその娘の奈緒子との会話が、死者が語る形で続いていく。「……こんなうちでも、生きていたら、お母さんみたいに穏やかに死んでいける？」と尋ねる娘の奈緒子に対し、「なんでうちのことが、全部わかるの」「なんで、うちが心穏やかに死んだて、わかるの」と死者は語る(あさの2008:187)。野辺送りの行われる日、死者となった松恵はこう語る。「娘の本心にも、孫の、曾孫の内奥にも、ほんとうに、何も……気づかぬままでしたねえ。百年近くを生きれば、全て枯れ、悟り、遺す思いもなくなり、身軽に旅立てるとばかり信じておりましたが、どうして、どうして、人間ってそう簡単に軽くはならないようです」(あさの2008:218)と。耳を澄ませば、稲穂が唄い、風も雲も唄う美しいお日和に、松恵は旅立つことになる。「金色に彩られたこの景色をゆっくり眺めましょう。わたくしが生きてきた風景です」(あさの2008:221)と言って。穏やかに見える松恵の心には「奈緒子は誰の子だ」と最後まで疑念を持ち続けて死んでいった夫への憎悪がある。しかし、野辺送りの美しい風景描写において、自らの死が受容されていく。死者に語らしめる手法を通じて、生者の側があたかも死を管理しつつしているといったあり様に一石を投じているように思われる。死者の沈黙は謎である。だが、多様な思いを抱きつつ死んでいったはずでありながら、遺された側は死者の気持ちを代弁したり解釈したりしてしまう。一見残された側には「穏やかな死」に見えるものにも、隠された濃密な情念の数々を潜ませているのかもしれないのに。

中島久美子の『介護小説 最期の贈り物』は、同居している姑が脳梗塞で倒れ半身不随で亡くなるまでの5年間、デイケアなどを利用するものの、姑を心から愛する大学教授の舅の徹三が献身的に介護にあたる。講義に出かける以外、食事の世話から夜中のおむつ替えまで根気よく介護する姿を嫁の奈美子は目の当たりにし、自分の夫はこうはしないであろうと嫉妬すら感じる。舅の徹三は嫁や孫娘に介護を任せず、率先して取り組む。姑のみつが重い便秘で「摘便」せねばならないときも、ゴム手袋をはめて介護教室で習ってきたようにする。嫁の奈津子が「私がします」と言っても、徹三は聞かず「夫婦なんだから」と押し切る。みつは徹三に感謝しつつ静かに息を引き取るが、その後、舅はほんやり過ごす日が多くなっていく。やがて徹三に幻覚・幻聴に襲われる夜間せん妄の症状が出てきて、老年性痴呆症(原作の表記)と診断される。夫や義妹は、世間体を気にして外部の力を借りずに嫁の奈津子が介護にあたることを当然とみなす。徹三はガス栓をひねり、トイレの位置もわからなくなり排泄をトイレ以外の場所で始める。また、鍵をこじ開けて外に出て徘徊し、警察のお世話になることもある。恐れや責任感ががんじがらめの介護役の奈津子は、娘の香子が変わると言っても頑なにことわる。娘の粘り強い説得で、行き詰った奈津子は精神科に通い始めたが、手首を切って自殺未遂を起こす。徹三の介護のことで妻の奈津子に手をあげたこともある夫は、初めて後悔する。その後、何をやってもぱっとしなかった娘の香子は、グループホームの紫苑の里の理念に共鳴し、自ら飛び込み祖父の徹三を引き取りここで介護する。と同時に、自分自身もそこで職員として働くことを決意する。過去の時間に生きる高齢者一人一人に寄り添う姿勢を学び、できる限り入居者の自由な行動を容認しているこのホームの理念にひきつけられていく香子であったが、徹三もまた慣れるにつれて顔付きが穏やかになってくる。紫苑の里で穏やかな生活を取り戻した徹三にとって、ここでの生活は「最期の贈り物」だったと孫娘の香子は思う。様々な確執が溶解し、徹三は見守られ息を引き取る。この小説には、舅による姑の夫婦間介護、嫁による舅介護、そして孫娘の勤務先であったグループホームでの介護という3つの類型が登場する。

なお、感情労働としての介護は犯罪を誘発する行為にもなりうるため、介護小説とはジャンルは異なるが、介護とくに認知症患者の介護がミステリー小説でとり上げられている。横山秀夫の『半落ち』は、「アルツハイマー病」と診断され、その症状が悪化し、ついには13歳で病死した一人息子の命日の墓参りの記憶も定かでない

くなるに至った妻の、せめて息子の記憶のあるうちに死にたいとの願いを聞き入れて、現職警察官が「囑託殺人」を犯す物語である。犯人は自首し、犯行自体は自首するが、犯行から自首するまでの2日間の行動については黙秘する（完全な自白である「完落ち」ではなく一部黙秘しているため「半落ち」）謎を解いていく物語である。「囑託殺人」そのものは主要なテーマとはなっていないが、この事件の裁判を担当することになった裁判官の一人の父も認知症を患っており、その父を長年介護し疲れ果てている裁判官の妻に、自分の手を汚してまで患者の願いを叶えた犯人を「優しい人」と作者は言わしめることで、認知症患者を含めて介護の現実の一端を問いかける作品になっている。東野圭吾の『赤い指』は、中学生の一人息子が犯した幼女絞殺の罪を、認知症の母を身代りにすることで隠蔽しようとする長男夫婦の企みが暴かれていくミステリー作品である。罪に陥れられそうになる母はかつて子どもたちと別居しながら長年認知症の夫を介護してきたが、そこで描かれる介護の実態は有吉作品以後の作品で描かれてきたものの域を超えるものではない。この作品の特異な点は、認知症の夫を亡くした母と「家目当て」に同居を始めた長男夫婦の間の冷たい関係の中で母がどのように認知症を患うに至るかを（認知症を患っていることを装うに至るかを）患者の心理に寄り添う形で描こうとしているところである。

IV 結語

介護者が女性、被介護者が男性の構図を自明視する傾向に対し、ジェンダー構造の縛りの強さが読み取れるとして、「介護者である男性を称賛する読み方は、女性による介護の当然視に支えられた観念である。(略) 実際には女性たちの大半が介護を担ってきたにもかかわらず、〈介護小説〉は、例外的な少数派である男性の視点で描かれた小説の方が多い。したがって、日本の近・現代小説においては、〈病妻もの〉が多くを占め、現実には多いはずの〈病夫もの〉は、ごくわずかとなった」(米村・佐々木編2008:12-13)と指摘されている。介護というのは、単に身体のケアを意味するだけではなく、対象が老人の場合、死にゆく人を看取る役割を担う行為である。有吉佐和子の『恍惚の人』の介護者の昭子が茂造の死を望みながらも、できる限りのことはしようとも思うといったアンビバレントな思いが交錯するように、感情労働につきもののこの背反は、人間の死を見とることでの安堵と、もっと心を込めた介護ができたのではという自責に苛まれる可能性がありえよう。介護の大変さを身をもって知っているからこそ、高齢嫁の「ぼっくり信仰」への思い入れ、すなわち「嫁や子どもの世話にはならないで逝きたい」との思いが高齢女性に強いのもうなずけよう。

「ぼっくり信仰」は、寝たきり、長期介護、下の世話などを他者に依存することへの忌避感情が根底にあり、老いから死に至る道程が安らかで穏やかであることを願う俗信である。死の「絶対不可知性」を思うと、こうした俗信が生き延びることも納得できよう。「ぼっくり信仰」は介護されることを忌避したいとの祈願であるが、介護をめぐる多様な文学作品が書かれ、すぐれた作品はその想像力ゆえに、我々の思いもしない視点ずらしによって視界を切り拓いてくれる。南木佳士の『阿弥陀堂だより』は、売れない作家の夫と精神を病んだ医者妻が夫の故郷に転居し、登らねばたどり着かない高地にある地域の阿弥陀堂を守り抜いて暮らす96歳をすぎたおうめ婆さんとの出会いの物語である。おうめ婆さんは、一見「ぼっくり信仰」の極楽往生を祈願する心性を超越したところにおいて、生きる上で一番大事なものを尋ねられるとこんなふうに答える。毎日南無阿弥陀仏と唱えることです。それは極楽へ行くためではない。「極楽浄土なんぞなくてもいいと思っているのであります。南無阿弥陀仏を唱えりゃあ、木だの草だの風だのになっちまった気がして、そういうもんとおなじに生かされていると感じて、落ち着くであります。だから死ぬのも安心で、ちっともおっかなくねえでありますよ」(南木2002:169-170)と。「ぼっくり信仰」にみられる「すがる心性」からほど遠い悟りの域に達しているように見えるおうめ婆さんであるが、念仏がすっぽり体の中に入ったように感じて毎日唱えるという。念仏なしでは生きられないとの吐露であり、このあり様もまた念仏にすがるといふより包まれることで死が怖くないのであろう。おうめ婆さんは「死ぬのも安心で、ちっともおっかなくねえでありますよ」と言い切る。自然の一部に自らが融合しているとの自己認識を生み出すものとして念仏が位置づけられている。そこには、すがる

のではなく包まれる対象としての念仏と合体しているおうめ婆さんがいる。だが、お守りも絵馬も消滅し、祈るという行為がなくならない限り、おそらく人間世界から非科学的な救済を担保する俗信が消滅することはないであろう。合理と非合理の間を生きる我々のあり様は、「ぼっくり信仰」などの俗信と連結してこれからも生き延びていくであろう。

「ぼっくり」は死に方の形容として文学作品でも登場している。例えば、川崎長太郎の絶筆となった私小説『死に近く』は、半身不随の81歳の私に接近する自らの死を意識しての展開である。この小説では、友人の死に方を、「心不全でぼっくり死んでいる」と形容している。また『黄落』でも、「患いもせずボックリ死ねていたら、父にとって幸せだったろう」と息子は回想する。ともに死に方の形容に「ぼっくり」を使っているが、こうした表現が肯定的な色彩を帯びているのは言うまでもない。

「ぼっくり信仰」に潜む介護をめぐるジェンダー問題はとかく不可視化されがちだが、「ぼっくり信仰」の別称でもある「嫁不要信仰」の名称に具現しているように、介護者として嫁を自明視して成り立つ信仰である。介護小説という文学での取り上げ方についても、夫が妻をけなげに介護する場面に光が当てられやすい非対称性について考えてみた。夫の妻介護には妻の夫介護には付与されない「気高さ」を読み込むストーリーについて、まさしく妻の夫介護の自明性が沈み込んでいると共に、プラスの価値としての自己犠牲や利他性といったものを基盤とした気高い愛情が、夫の妻介護に付与される非対称を再考してみる必要があるであろう。小説もまた社会を映し出す鏡であることを、こうしたジェンダー非対称性が語っていると思うからである。

註

- (1) 「ぼっくりとは、漢字で書くと保久利、ホコリがなまったもので、安全、円満、安穩に、ということ。往生は、「捨此往彼蓮華化生」から二字をとったもの、つまり、ボックリ往生とは長生きをして死ぬ時には人に迷惑をかけず、自分も苦しまず安楽に、という意味になりますな」(朝日ジャーナル編集部編、1975:87)とある。また、「ぼっくり」と「コックリ」が似ているとし、「例えば、居眠りなどで、上体が急に“がっくり”と前後に動くさまであって、ここでは特に「コックリ往生」することをいう」とある(塚本1976:12-13)。
- (2) 本稿では「習俗」「民俗」という語を使用せず、「土俗」を用いる。「習わし」など広い概念である「習俗」でも「人民の風俗」を意味する「民俗」でもなく「土俗」を使用するのは、この語が「その土地の風俗や習わし」を指し、その土地その土地により信仰対象や呼び名や祈願方法などが異なるからである。「土俗」は、各地の風俗や言い伝え・伝説などの意味でよく使用されていたが、「日本民俗学会の創設(一九一二年)と同機関紙『民俗』の発刊などにも見られるように、それ以降はあまり使われず、民間伝承さらには民俗の語に次第に置き換わった」(福田・新谷他編2000:2-9)と記されている。礫川(2004)では、土俗を「アカデミズムが正面からはとりあげられないようなテーマ」「人間存在の実相、本質にわたる重大なテーマ群」を扱うとして、たとえば「糞尿」「人喰い」「浮浪と乞食」「刺青」「生贖と人柱」といったテーマを扱っている。
- (3) 俗信という語は、迷信、民間信仰、民俗信仰、庶民信仰などと絡まり不鮮明な使われ方をしている。「日本の民俗文化を明らかにするための手掛かりとなる生活知識。長い経験によって機能した知識ともいわれ、禁忌・占い・予兆・民間療法・妖怪変化・幽霊などが含まれる」(福田・新谷他編1999:980)とある。板橋は、俗信を非科学的なものとして烙印してよいのかとの問題意識から、そこに潜む文化的意味を問ひかけ、さらに「これら低級な信仰、非体系性、断片性、非合理(非論理)性などの言葉は、民俗誌や市町村誌で俗信を報告するときに、まるで俗信の枕詞のように使われている。俗信は、世間のふつうの人びとにはもちろん、民俗学研究者にすら、恥ずべき、くずのような信仰と蔑まれてきたのである」(板橋1998:16)と、「戦後におきたいわば俗信パッシング」を指摘する。この立場の代表例に井之口の名をあげ、俗信を「宗教の墮落形」に位置づけられたと記す(板橋1998:18)。井之口(1952)は、「最近、民間信仰という言葉が、やや混乱して使われている。ある場合には、民俗学であつかう信仰現象一般を指し、ある場合には、俗信に置きかえて用いられている」とし、さらに次のように記す。「神社神道を含めた既成宗教の信仰に対立するものとして、『民間信仰』は適切な表現であり、われわれが『信仰』としてあつかっている部門も、この民間信仰の意にほかならないのである。これに対して俗信は、それらの信仰現象が信仰をうしない、おちぶれて、形だけをとどめているものを含むと同時に、信仰に並行していかなる民族・社会にも常に存在するような心意現象が、一定の形を持った場合に、これを俗信と呼んでいる。すなわち民間信仰に限らないということである」(井之口1952:40)。また、高野(2002)は、若者層で広まっている「現代の俗信」を紹介し、俗信=おまじないとして論を進めている。「忘れてならないのは『俗信』も、特別な道具立てや専門的職能者を必要としないということである。だからこそ巷間に流布したのだ。つまり消費社会以前の『俗信』も、現代のくおまじないも、担い手たちにとって身近なものを題材にする点で変わりはない。ただ、今日、その日常的なもののほとんどが商品であることは疑いない」(高野2002:63)。本稿では、迷信が明白なマイナスの影響をもたらすものと一般的にされているのに対し、合理性・科学性がなくとも、迷信のようなマイナスの影響をもたないものとして俗信を位置づける。
- (4) 「ぼっくり信仰」の信仰対象は、観音と地藏が多いとはいえバラエティに富んでいる。現地調査からいくつか例をあげると、例えば「ぼっくり信仰」で有名な奈良県の吉田寺では、阿弥陀仏が信仰対象とされている。また、東北地方では「ぼっくり」のかわりに「ころり」をつける寺社に出会うが、その代表として「ころり薬師」を祀った山形県米沢市の普門院があげられよう。埼玉県川口市の西光寺でも「ぼっ

くり業師」が祀られている。その他、那須与一（「与市」の表記も併存）を祀ったものとして、徳島県西郡にある与一神社がある。那須与一が敵の平家の軍馬の一発で射止めた故事は有名だが、この故事とぼっくり信仰との関わりは次のように説明されている。「いわゆる一発命中という小気味のよい語り草が、生死の苦しみを一発でとり除いてくれるという、人間の願望につながり、そのことがぼっくり信心ということに発展したと想像するのは、それほどむつかしいことではないようです」（塚本1976：170）。「嫁いらず信仰」についてはその信仰対象が、「地藏」「観音」に収斂傾向にあることの意味を、介護が女性に配分されることの問題を含め、拙稿（佐々木2013・2015）で論じている。ジェンダーの視点を抜きには論じられない問題である。

- (5) 「本来仏教用語であり、仏や菩薩の慈悲、また修行などによりこの世で得られる幸福や利益をいう。（中略）しかし、一般には祈願や呪術的な行為により得られる直接的利益を意味し、比較的宗教性の浅い信仰態度を指す言葉として用いられることが多い。現世利益が個人の幸福に関心が集中し、病気治し、祈願成就、経済的向上などがその主な内容であるからである」とあり、民俗信仰には殊に商売繁盛・家内安全・病気治療などの現世利益が顕著とある（福田・新谷他編1999：580）。
- (6) 「第三人称が平静の原理なら、第一人称は疑いもなく苦悶の源泉」であり、第二人称の死すなわち「親しい存在の死は、ほとんどわれわれの死のようなもの、われわれの死とほとんど同じだけ胸を引き裂くものだ」（Jankélévitch, Vladimir, ジャンケレヴィッチ1966=1978：25、29）との指摘のように、死は「人称」を潜伏させているため、通常、自分とは無関係な「第三人称の死」に平然としていられるが、「二人称の死」や「一人称の死」に直面すると、衝撃を受け悲嘆のあまり絶望に落ち込むことは想像に難くない。例えば、世界的ベストセラーかつロングセラーである「死ぬ瞬間」の著者であり、死に逝く人々の声をすくいあげ、死の受容に至る心理的プロセスを解き明かしたKübler-Ross（キューブラー・ロス1969=2001）でさえ、自らが脳卒中で半身不随になった時、「一人称の死」を前にして、不自由になった自らの身体を呪い「私は神に、あなたはヒトラーだ、と呼びかけた。でも神は、ただ笑っていた」と発言したとされている。この発言は2004年12月25日に放映されたNHKのE TV特集「最後のレッスン キューブラー 死のまぎわの真実」（出演：柳田邦男【作家】・山崎章郎【医師】）で紹介されたものである。内容の詳細については、<http://www.nhk.or.jp/etv21c/update/2004/1225.html>で知ることができる。「死ぬ瞬間」では、「死」の受容にいたる5段階として、否認、怒り、取引、抑うつ、受容があげられている。Kübler-Rossは、「ターミナルケア（終末期医療）、サナトロジー（死の科学）のパイオニア」として、Kübler-RossとKesslerの共著「ライフ・レッスン」（2001=2005）にも紹介されている。
- (7) 介護小説の選定にあたっては、長井（2004）；尾形・長谷川（2008）；米村・佐々木編（2008）を参照し、国会図書館・CiNii・大規模書店のホームページなどを使って検索し、「介護小説」でヒットしたものを中心に扱っている。
- (8) 想像力の定義を、たとえば厚東（1991）は、「社会的認識において」とことわりを入れているが、「想像力imaginationとは、対象をイメージimageとしてとらえる能力のこと」としている。村瀬（2010）も「像をつくる力」とし、想像するとは自分が想う以前にはありえないものを可能なものとして「産出する力」と定義している。
- (9) データの入手先は、以下の2か所からであり、グラフは筆者作成。1つは、「2015年の高齢者介護」の中の補論1「わが国の高齢者介護における2015年の位置付け」（<http://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/kentou/15kourei/3a.html>）。いま1つは「平成24年版 高齢社会白書（全体版）」の中の「第1章 高齢化の状況」の「高齢者の介護」（http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2012/zenbun/sl_2_3_02.html）。アクセス2015年5月14日。

文献

- 青山光二（2003）『吾妹子哀し』『吾妹子哀し』新潮社 5-63.
 有吉佐和子（1982=2003改訂版）『恍惚の人』新潮文庫。
 朝日ジャーナル編集部編（1975）『ぼっくり寺をよぎる老いと死』朝日ジャーナル 17（54）：86-91。
 あさのあつこ（2008）『金色の野辺に唄う』小学館。
 福田アジオ・新谷尚紀他編（1999）『日本民俗大辞典上』吉川弘文堂。
 福田アジオ・新谷尚紀他編（2000）『日本民俗大辞典下』吉川弘文堂。
 東野圭吾（2006）『赤い指』講談社。
 今村仁司（1992）『老い—排除と差別』『仏教』18:37-47。
 井之口章次（1952）『俗信について』『民間傳承』16（6）：280-283。
 板橋作美（1998）『俗信の論理』東京堂出版。
 伊藤比呂美（2011）『とげ抜き 新巣嶋地蔵縁起』講談社文庫。
 Jankélévitch, Vladimir（1966）*La Mort*, Paris: Flammarion =（1978）仲澤紀雄訳『死』みすず書房。
 川崎長太郎（2013）『死に近く』川崎長太郎老境小説集 老残 死に近く』講談社文芸文庫。
 耕治人（2007）『そうかもしれない』『そうかもしれない』晶文社 107-151。
 礪川全次（2004）『土俗とイデオロギー—歴史民俗学資料叢書[解説編]』批評社。
 厚東洋輔（1991）『社会認識と想像力』ハーベスト社。
 Kübler-Ross, Elisabeth（1969）*On Death and Dying*, London: Routledge =（2001）鈴木晶訳『死ぬ瞬間—死とその過程について』中公文庫。
 Kübler-Ross, Elisabeth & Kessler, David（2001）*Life Lessons*, New York: Scribner =（2005）上野圭一訳『ライフ・レッスン』角川書店。
 松崎憲三（1991）『現代社会と民俗信仰』名著出版。
 モブ・ノリオ（2004）『介護入門』文藝春秋。
 森幹郎（1982=2003改訂版）『解説』『恍惚の人』新潮文庫 430-437。
 村瀬綱（2010）『想像力と共感—可能なものの実在について』『哲学雑誌』797：59-77。
 長井苑子（2004）『生きつづけるということ—文学にみる病と老い』メディカルレビュー社。
 南木佳士（2002）『阿弥陀堂だより』文春文庫。
 水村美苗（2015a）『母の遺産 新聞小説上』中公文庫。

- 水村美苗 (2015b) 『母の遺産 新聞小説下』 中公文庫.
- 中島久美子 (2001) 『介護小説 最期の贈り物』 学陽書房.
- Nisbet, Robert (1976) *Sociology as an Art Form*, New York : Oxford University Press = (1980) 青木康容訳 『想像力の復権』 ミネルヴァ書房.
- 丹羽文雄 (1974) 『厭がらせの年齢』 『丹羽文雄全集第三巻厭がらせの年齢 有情』 講談社 77-105.
- 尾形明子・長谷川哲 (2008) 『老いの愉楽—「老人文学」の魅力』 東京堂出版.
- 荻原浩 (2007) 『明日の記憶』 光文社文庫.
- 大谷いづみ (2005) 『太田典礼小論—安楽死思想の彼岸と此岸』 『死生学研究』 5 : 99-122.
- 佐江衆一 (1999) 『黄落』 新潮文庫.
- 三枝和子 (1999) 『野守』 『三枝和子・林京子・福岡多恵子女性作家シリーズ』 角川書店 36-49.
- 佐々木陽子 (2011) 『三つの異なる死生観：宗教的、科学的そして土俗の見地から』 『鹿児島国際大学大学院学術論集』 3 : 1-12.
- 佐々木陽子 (2013) 『家族介護における「嫁」：その無償性と相続問題』 『福祉社会学部論集』 32 (1) : 1-14.
- 佐々木陽子 (2015) 『「嫁いらず信仰」から見えてくるジェンダー—信仰対象はなぜ観音と地藏に収斂するのか』 『福祉社会学部論集』 33 (4) : 1-14.
- 篠田節子 (2014) 『長女たち』 新潮社.
- 高野誠司 (2002) 『現代の「俗信」』 『日本宗教学雑誌』 24 : 55-65.
- 塚本哲 (1976) 『ぼっくりさん信仰』 保健同人社.
- 横山秀夫 (2002) 『半落ち』 講談社.
- 米村みゆき・佐々木亜希子編 (2008) 『〈介護小説〉の風景—高齢社会と文学』 森話社.

Care Issues Lurking in *Pokkuri Shinko* (the Belief in Sudden, Easy Death): Contemplated through Literary Works

Yoko SASAKI

Pokkuri Shinko is the folk belief that a person can pass away without suffering a long illness by performing tasks like wearing blessed underwear. This study aims to utilize the power of “nursing novels” to examine the state of nursing that is avoided by *Pokkuri Shinko* from the perspective of gender. It has been identified that while there is a high rate of women (wives and daughters-in-law) caring for men (husbands and fathers-in-law) in real home nursing, there is the tendency in “nursing novels” to depict husbands caring for their wives with a sense of noble beauty. The epoch-making work *Kokotsunohi to* by Sawako Ariyoshi dealt with dementia; however, it has been reported that this novel was connected with the onset of the boom in *Pokkuri Shinko* because of the significantly quoted statement, “I don’t want to end up like that.” This study attempts to classify 15 literary works that were published following Ariyoshi’s work in patterns, utilizing the criteria of caregiver and care receiver.

Key Words: nursing novels, caregiver and care receiver, *Pokkuri Shinko* (the Belief in Sudden, Easy Death) gender, literary works